

忠敬生前に建てられた記念碑の立つ唐丹（とうに）

大災害を受けた地域の測量模様を続ける。

「享和元年九月二十二日 朝より曇る。六ツ後出立。宗平、慶助は昨日の残を測り、直に越喜来を測。余と郡蔵、秀蔵は唐船看所にて所々測る。越喜来（おきらい）村、浜々おおし。七ツ後に着。止宿肝入善左衛門。此夜雲中測る。」

越喜来は深い入江の最奥だ。三陸町の綾理（りょうり）から、陸路を越喜来（おきらい）に測っている。忠敬と郡蔵、秀蔵は唐船看所で方位を測ったという。唐船看所（とうせんかんしょ）の意味は分からない。事典にも出てこない。方位を測ったのだから見通しはいいのだろう。唐船がこんな所まで、漂着するとも考え難いが、地元の方に御教示いただければ有難い。雲中測る、は雲の間に星を探して測ることである。

大船渡市三陸町越喜来の被害状況は甚大だった。岩手日報のHPではつぎのように記す。

防潮堤や防波堤の多くが倒壊し、平地の集落が広範囲にわたって被害を受けた。大船渡市役所三陸支所、越喜来小、三陸公民館など主要施設や商店街が全壊。さんりくの園（特別養護老人ホーム）で利用者、職員 48 人が死亡。地区の死者、行方不明者は 97 人に上り、全壊家屋は 264 戸。越喜来漁協の関連施設や三陸畜養センター、アワビ種苗センターなどが全壊。漁業者の小型船約 230 隻のうち、200 隻ほどが流失、破壊された。



<http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/aruku/aruku111217.html>

「同二十三日 越喜来村出立。手分、郡蔵、秀蔵は朝早く七ツ半出立。我等、宗平、慶助は六ツ後に立。吉浜（よしはま）村、唐丹村、唐丹村の内、大石浜より船にて引縄測る。是を終とす。七ツ頃に着。止宿西村善太郎。肝入周蔵。」

測過したと名前しか出てこない吉浜は、今はアワビで有名で、香港でキッピン（ハオ）といわれる最高級の干したアワビ（干鮑）を産し、中国料理では珍重されているという。ほとんど中国に輸出しているため、国内より海外、特に中国の方が有名というから驚きである。

キッピンの吉浜では、忠敬は手分けをして街道筋を測っています。

今回の東北地方太平洋沖地震で甚大な被害を受けた三陸地方のなかで、吉浜地区の住民およそ 1400 人のうち行方不明は 1 人。倒壊した住宅は 440 戸のうち、3 戸、4 棟に留まったという。その訳は、

1896年、明治三陸地震で当時の住民の2割を失うなど、大きな被害を受けたあとの教訓を守り、村長たちが低地にあった集落を高台に移したお陰だそうです。高さ20メートルにも達した今回の津波で、あわび、ホタテの養殖は被害を受けたようですが、20メートル以上の高所にあった住宅は住民を守りきりました。（so-net のブログより） <http://nikitoki.blog.so-net.ne.jp/2011-03-28>



拡大

津波で破壊された岩手県大船渡市・吉浜湾の漁港。漁網やブイが散乱していた＝

15日、遠藤写す

それから、漁港は壊滅的な打撃を受け、約300人が加盟する吉浜漁協も施設のほとんどが破壊されたが、吉浜湾内で作業中だった漁師の大半は難を逃れたという。一瞬の判断が命を守ったというが、先人の経験を生かしたということだろう。

3月11日午後2時46分、ワカメの間引きをしていた漁船約10隻を、地震が襲った。「いつもの地震と違った」と柏崎寿さん(59)。船底からガタガタと大きな音がした。湾を囲む岬の森から、スギ花粉が山火事の火の粉のように舞い上がるのが見えた。船上には、妻の久美さん(54)、次男の紘治さん(26)もいた。柏崎さんは作業を中断し、沖へ急いだ。水深約70メートル地点で停泊。津波が押し寄せたのは約15分後だった。「水面の上昇に合わせて船全体が浮き上がっただけ。全く揺れなかった」

道下孝人さん(47)と父の芳男さん(76)が乗っていた3トンの漁船も地震で大きく揺れた。孝人さんの頭をよぎったのは、昔から聞かされていた知恵だ。「水深の深い沖なら津波は高くならない」 芳男さんも、先輩漁師から「昭和8(1933)年の三陸大津波で、沖に出て助かった」と聞いたことがあった。エンジンを全開にして数キロ先の沖をめざした。船が津波を越えていった感覚はなかった。だが、振り返ると、漁港の方で波が盛り上がり、白波が立つのが見えた。

昨年の子リ地震で津波が届いた際も、湾内の多くの船が沖に出て乗り切った。一方、庄司満さん(55)の船は小型だったのでスピードがない。雨風をしのぐ船室もないため、一晚停泊したら凍死の恐れもあると考えた。「目安は15分だった。それまでに陸に上がればギリギリ逃げられると思った」。不安はあったが、ちょうど15分で岸に到達。車でさらに高台に逃げた。その10分後に津波が襲ってきた。庄司さんは「一瞬の判断。ばくちだった。生き延びたが、二度と見たくない光景だ」と語った。

asahicom のHPから <http://www.asahi.com/special/10005/TKY201103160089.html>

越喜来から吉浜を経て唐丹までの測量は、2手に分かれた手分け測量がおこなわれた。先手は尾形慶助と伊能秀蔵、七つ半というから夜明け1時間くらい前に出発した。提灯をつけて、忠敬、郡蔵、宗平らが受け持つ手前半分は測量しないで通り過ぎ、夜明けに受け持ちの場所に到着して、目印の杭を打って後半部分を測量した。

忠敬本隊は夜明け少し後に宿を出て、前半部分を先手の残した杭まで測ったろう。それから後は測量しないで、合流点まで進む。日記に書いてないが、ここでは多分、越喜来から唐丹（とうに）の大石浜まで（約10キロ）を2手に分けて測り、大石浜で合流して、大石から唐丹湾の仏ヶ崎まで、全員共同して海上引き縄をおこない、あと唐丹の本村まで測ったと思われる。

海上引き縄は少なくとも船3隻は要るから、全員でかからないと出来なかったろう。当時は唐丹までが仙台領で、釜石は南部領、引き縄測量はここが最後だった。七つ着なので、結構時間がかかっている。大石浜には伊能測量海上引き縄の記念碑が立っている。

「同二十四日 前夜より風雨、今四ツ頃に至止む。逗留。午後より晴る。夜測量。気仙郡大肝入より高田村検断忠兵衛、浜々村添案内。此所に至り南部領大槌町役人と対談し、是迄仙台領の止宿。首尾合。村々浜々役人案内、大肝入よりその支配の手配り、肝入検断付添の儀、領主より村触、並に難所道繕等迄委細に通達す。然る所南部領には、公儀触は勿論、領主より此度の御用触無之由に付、急に大槌支配の南部役人へ申遣し候よし。それより海辺村々掛役人へ大槌町支配より申合。その支配の間村役人を別に一兩人宛付添、止宿。人足の儀執斗ける間、仙台領案内忠兵衛。並に唐丹浜の役人よりかけ合なくば、南部領にては止宿等の差支は無覚束候。唐丹より平田村山越、此間仙台領、南部領界、是迄気仙郡、是より閉伊郡、此界より大槌町支配付添案内 佐助、清助なり。村々役人送迎は同前。」

「同二十五日 朝六ツ後唐丹浜出立。此日曇天。南部領閉伊郡平田村、肝入市兵衛という。家作大によし。此所にて中食す。釜石村九ツ頃に着。止宿肝煎宇右衛門。家作大によし。昼後晴。測器仕立。夜に入大曇。」

唐丹は到着の夜から風雨になり、翌日八時頃まで続いたので逗留する。検断は仙台藩の制度で駅馬を扱う役人、肝入は庄屋・名主に相当する。仙台領最後なので、付き添っていた検断忠兵衛と一献酌みかわし、領主から触れが流されて、大肝入の指示で検断、肝入が付き添い、村役人が案内していただいた丁寧な扱いに、感謝の気持ちを述べたかもしれない。

そのなかで、釜石以北を支配する南部藩の扱いが気になって、南部藩の大槌町から役人を呼ぶことになったのだろう。南部側には、幕府からの先触は勿論、領主からも何の通達も無かった。仙台側の検断忠兵衛から（きちんと応対しないと藩の手落ちになるよと）交渉してもらって、同じように案内が受けられるようになった。忠敬先生日記には宿の手配なども、忠兵衛の折衝がなかったらどうなったか分からないと更に具体的に、ほっとした気持ちが記されている。

郡境から大槌支配の南部役人が付き添い、平田村で昼食、正午には釜石についた。昼食、宿舎とも良い家だったので、家作大によし、と記録する。よく出てくる文言である。到着すると晴れていれば天測機器を据え付けて準備するのが普通だった。この日は残念ながら大曇りで天測はできなかった。

唐丹には、有名な「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」と「星座石」と呼ばれる記念碑がある。唐丹の篤学者葛西昌丕（かさい・まさひろ）が建立したものである（昭和六十年県指定文化財）。建立年は文化 11 年とあるから忠敬 69 歳、第八次測量から帰着した年である。

葛西の年齢は、測量のとき 37 歳、建碑のときは 50 歳と推定されている。地元では葛西は忠敬に会っていると論じ、伊能忠敬研究家・保柳博士は会っていないと否定する。その詳細はHPイノペディアを参照願いたい、どう考えたらいいであろうか。

測量日記や多数の地元史料を通した感じでは、こういうとき、地元の 37 歳の篤学者だったら、必ず会いに行ったと思う。会う、会わないは忠敬の勝手であり、書き残すかどうかも定かでない。書かないほうが多いだろう。しかし、会ったとすれば本人は必ず記録に残すと考えられるが、見つかってはいない。それに、本人がいなかった場合はやりようがないだろう。

唐丹の場合、私は、葛西は現地にいなかったのではないかと思う。データは後で入手の方法はあったから、後年データを入手して、現場に立ち合えなかった残念な想いから建碑したのではないだろうか。

http://www.inopedia.jp/img/f_users/r_10782108img20100612123203.pdf